

書林

2009 年 10 月 14 日 発行

第 76 号

ルーマニア貧乏旅行-----	1
自著紹介-----	2～3
私の図書館活用法-----	4
私の薦める 1 冊-----	5～10
Welcome to SGU Library -----	11～12
from Library-----	13
編集後記-----	14

ルーマニア貧乏旅行

泉 亮太（人文学部臨床心理学科 3 年）

佐々木冠・播磨谷両教授 2 名と、学生 7 名の計 9 名でルーマニアへ、バックパッカーを行ってきた。バックパッカーと聞いて、イメージがわく人は少ないだろう。簡単に言うと、カバン 1 つで行う貧乏旅行である。私自身ヨーロッパ旅行自体が初めてだったため、小さなこと一つ一つが新鮮な体験だった。

ルーマニアは本州とほぼ同じ面積である。なので、都市から都市の移動一つ一つにかかる時間が長い。私たちの主な交通手段は鉄道を使っているものだったが、最低でも 3 時間、長い時間乗るときで 12 時間近く移動に費やすこともあった。私たちは貧乏旅行を行っているため、電車のランクも一番低いものに乗る事になっていたため、移動は体力、精神共に相当な負担であった。このような過酷な移動であったが、各都市で様々な感動を得ることができた。町並みがとても美しく、一つ一つの建築物に歴史を感じることができた。しかし、明るく美しい側面だけではなく、差別やストリートチルドレンの存在は、日本で、特に北海道では遭遇することはほとんど無い。これらの遭遇は私にとって衝撃的なものであった。

中学生から高校までの 6 年間、大学では 2 年間と英語を勉強してきた。何の疑問も無く学習してきたし、英語は万国共通と教わってきた。ただ現実には違った。どこの国でも英語は学習しているものと考えていたが、実際は違ったようである。ルーマニアの首都で英語が伝わらず苦労し、地方の駅で切符を買うのにも苦労した。これらのことは私に衝撃を与えた。今まで、英語さえ何とかできれば海外でも不自由しないと甘い考えを持っていたからである。この時にいかに海外に対して目が向いてなかったかを痛感した。日本は島国のために、日本人は日本語のみを使って生活している。これが当たり前だったし、日本にいる限りは少なくともしばらくは、この生活が当たり前であるだろう。しかし、ヨーロッパでは違った。私が知り合って会話をしたルーマニア人は英語を話せるほかに、イタリア語・スペイン語・フランス語も話せると言う。仕事はチャーターバスの運転手をしていたが、話せないと仕事に支障が出るとも話していた。日本に住んでいて、このようなことはない。これらの話を聞いて、私はいかに世界を知らずにいたかを知った。

今回の旅行は私に様々なことを教え、様々なことを考える事ができる旅行であった。この経験を胸に、日本だけに限らず世界に目を向けられるようにしたいと強く感じる。とても貴重な経験をする事ができた。



後列左から 2 番目が泉くん

『ハイデガーの弁明 ハイデガー・ナチズム研究序説』

奥谷 浩一 著

梓出版社 2009年3月



ドイツの哲学者ハイデガーはしばしば20世紀を代表する思想家として評価されます。その彼が1933年にフライブルク大学学長になったさいにナチに入党し、そのおよそ1年後にこの職を辞任したことは周知の事実です。多くの人々は、政治に無知な哲学者が一時期はナチズムに共鳴したもののやがてその凶悪な正体に気づいてこれと袂を分かったのだと考えていました。しかし、1980年代末にフェリアスとオットによって、ハイデガーがナチスの崩壊時までナチ党员であり続け、彼のナチ関与が決して偶然的・一時的なものではなくて、持続的・必然的なものであったことが明らかにされ、大きな衝撃を与えました。ハイデガーが何ゆえに、世界史上最も残忍な政治体制でありおよそ600万人のユダヤ人を虐殺したあのナチズムに共鳴し、これと深い関係をもちえたのか。このことと彼の哲学とはどう関係するのか。私も彼らの研究から独断のまどろみを破られ、この問題の研究をいくつかの研究テーマのひとつとして取り組み始めて10年になります。本書の目標は、その中間的総括として、歴史的側面に重点を置き、彼の名著『存在と時間』執筆の前後から第二次世界大戦後までの各時期に彼とナチズムとのかかわりを、彼らが参照しなかった資料をも用いて解明することでした。

私を含めて多くの人々がこの問題にかんして思い違いをしたのは、ナチ時代の責任を追及されたハイデガーが自らの「弁明」のなかで、自分とナチとの関係が最小限度のものであったように見せかけて、この戦略が成功を収めたからです。ハイデガーは、さまざまな機会に行った「弁明」のなかで真実を隠蔽・沈黙したり、意図的に虚偽を述べたり、一部の真実に虚偽をつなぎ合わせて歴史を書き換えたりなどの作為を行いました。この「弁明」は、最終的には「事実と思想。1933/34年の学長職」という小冊子のなかに定式化され、彼とナチズムとの真の関係を歪める見解のたえざる源泉となってきました。しかし、この「弁明」は、アテネの法廷で死を賭してなお真実を述べてやまなかったあの高貴なソクラテスの弁明とはおよそ正反対の精神、つまり、自己保身と自己の偶像化という世界的な哲学者にはふさわしくない精神で貫かれています。

本書では、まず序論で若い時代から第三帝国の敗北にいたるまでのハイデガーのナチ関与の実態を概説し第1部でハイデガー「裁判」の経過と結末をたどり、第2部でハイデガーの「事実と思想」のなかに含まれる真実と虚偽とを徹底的に解明しました。さらに第3部として、学長時代のハイデガーが後にノーベル化学賞を受賞した優れた化学者シュタウディンガーをあの悪名高いゲシュタポに密告した事件を取り上げました。そして最後の第4部では、ハイデガー擁護論の側からの数少ない応答であるシルヴィオ・ヴィエッタの著書を批判しました。

本書は、すでに「図書新聞」を初め、いくつかの新聞・雑誌等で書評の対象となり、わが国最初の本格的なハイデガー・ナチズムの研究書として反響を呼び始めています。本書がきっかけとなってハイデガーとナチズムとの関係をめぐる真実が少しでも世に膾炙し、そこからハイデガー哲学の意味の解明とその再評価が少しでも進展することになれば、私にとっては望外の喜びです。本書は副題に明らかなように「序説」にすぎません。これからは、ハイデガーの思想に内在し肉薄して、ナチズムとのかかわりを哲学思想の面から解明するという課題を本論として追求したいと念じています。

『近代日常生活の再発見 家族経済とジェンダー・家業・地域社会の関係』

谷 沢 弘 毅 著

学術出版会 2009年6月



学問の分析対象は往々にして、データが入手し易いものからしづらいものへ、身近にしばしば発生する現象から稀にしか起こらない現象へと移動するものである。この一般原則に照らして考えると、プライバシー（個人情報）の塊である家族経済行動を分析することは、企業・産業行動や政府行動と比べて研究者が少ないのは当然であり、それゆえに研究のスピードも遅くならざるをえない。本書をこのような学問の発展パターンに即して位置づけるなら、前著（『近代日本の所得分布と家族経済』本図書館収蔵）に引き続きひたすら筆者の個人的興味にもとづき細々と進められてきた、地味な研究といえる。

とはいえこのような行動が好事家の道楽かといえ、それは言いすぎであろう。なぜなら家族経済行動を分析することは、経済の一部を構成する家計部門をより深く解明するために回避できない、本来的な研究であるはずだからだ。少なくとも研究者数の多寡と研究の重要性との間には、なんら関連性がないことをこの場で明記しておくことが重要かもしれない。それにもかかわらず家族経済に関する歴史研究（つまり家族経済史研究）は、専門家にとっても決して認知された分野ではない。それどころか家族経済史研究の蓄積がないために、その分析アプローチを説明するだけでも一苦勞である。

この点において、本書は「日常生活」を通して家族経済史研究という研究領域の重要性を執拗に主張し、その分析アプローチとその成果を説明することに努めた。例えば、本書で扱った日常生活は、掘み所の難しいテーマであるが、これを経済史学より分析するために、①多様な行動の集合体であること、②各行動を時間軸でみた場合に固有の循環性が備わっていること、の2点に留意する必要性を指摘した。その上で、エンゲル係数等のデータを解析したり、「日常生活」「日常茶飯」等の用語の普及・使用状況の変化を文献から抽出したりして、我が国では1920年ごろより日常生活における構造変化が現われていたため、このように変質してきた日常生活を序章において「近代日常生活」と命名している。

近代日常生活の中身については、ジェンダー、家業、地域社会という3つの視点から接近している。まずジェンダーの視点とは、第2章で性別役割分業の成立に関する歴史仮説（性別役割分業仮説と命名）を、新中産階級（俸給・職人世帯）を対象とした2つの代表的家計調査で再検討した。家業については、第3章において旧中産階級に属する小売商世帯の家族経済を家業部門と家計部門に分割して、その相互依存関係を探った。俸給世帯とは違った独自の家族経済構造が垣間見られるはずである。さらに地域社会については、第4章で戦前期の東京市における方面委員制度（戦後の民生委員制度に相当する制度）が円滑に導入された背景に、地域内の住民に特別の属性が備わっていたことを指摘したほか、第5章では戦後の札幌市における生活保護制度を対象として、具体的な問題点の抽出と改善点の提言をおこなっている。そして両章とも、低所得世帯の生活再建にむけて、地域社会の関与が重要となることを強調した。なお以上の各章の分析にあたっては、筆者が前著で提起した個人計量経済史学という分析アプローチをできるだけ活用することに努め、そのために第1章で改めて同アプローチの有効性を検討していることも付言しておきたい。

いずれにしても、各章の具体的内容の説明はここでは省略させていただくが、ご興味のある読者は是非、一読をお勧めしたい。本書には灰汁の強いテーマと格闘した形跡が散在しているが、前著と同様に戦前社会の意外な一面を知ることができるはずである。

学習支援室から～私の図書館活用法～

図書館の利用方法について

清水 拓朗（大学院地域社会マネジメント研究科2年、
学習支援室 院生相談員）

皆さん図書館は利用していますか？ レポートや試験、論文の作成等で利用する方、閲覧室にあるパソコンを利用される方、DVDの閲覧で利用する方も多いでしょう。

私は図書館で、時間をつぶすために本を探すことや、少し勉強をするのに利用しています。さまざまな図書館の利用方法があると思いますが、皆さんが図書館を訪れるときはどのようなときでしょうか。

図書館を利用しない方には「図書館には用事がない」という方もいるでしょう。しかし、私は図書館を訪れることだけでも、いろいろな情報をすぐ手にとることができるので、素晴らしいことだと思います。また、「テスト期間にしか利用しない」という方……図書館に行き本を読んでみてはいかがでしょうか。例えば私は、就職活動や資格の勉強をするのに利用することがありました。皆さんも経験することなので、早いうちからこのような本を読むことも良いかもしれません。また、日ごろTVや新聞を見ていると何か疑問を持つことがあります。こういった調べものをするときにも図書館は力を発揮してくれるでしょう。

図書館の利用方法は皆さんそれぞれスタイルがあると思いますので、是非、「自分にあった図書館の利用の仕方」を見つけてください。図書館は、あなたの利用次第で大きく価値が変わります。私は私自身に大きな変化を求めたとき、用事がなくても毎日図書館に通っていました。幸運を！！



学習支援室入口



学習支援室内



第1閲覧室



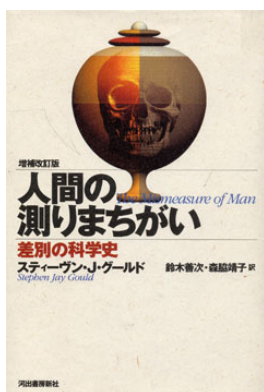
第3閲覧室

『人間の測りまちがい 差別の科学史』

スティーヴン・J・グールド 著

鈴木 善次、森脇 靖子 訳

河出書房新社 1998年11月



大学卒業後、仙台に出て一人暮らしを初め、大学院生としての新しい学習環境に少しずつ慣れてきた頃のことである。「院生なら当然読むべき本」として、誰からともなく紹介されたのが、この『人間の測りまちがい 差別の科学史』（S.J.グールド著、鈴木善次・森脇靖子訳、河出書房新社：現在は増補改訂版）であった。グールドと私の、これが最初の出会である。以後、私はグールドに私淑し、その著作が次々に翻訳されるのを心待ちにするようになる。一流の古生物学者であり、手練れのサイエンスライターであったグールドは、残念なことに2002年にまだ60代初めの若さでこの世を去った。が、いくつかの著作がこれから訳され、読めるはずであるのが、極東の1読者にとってはせめてもの救いと言えようか。

さて本書は、タイトルが示すように、「人が如何に他者を測定しようとしてきたか」についての本である。私たちは幼少時から、身長・体重等の身体的側面に始まり、運動能力、学力、性格、知能等に至るまで、様々なことを測定される。しかし、「アタマやココロ」の領域の測定は容易ではない。加えて私たちは、自分や他人の測定結果について知りたいし、出来ればそれを利用したいと考える。それらの測定結果をどう解釈し、またどう利用すればよいのか。更に、解釈・利用の仕方に、望ましいもの、望ましくないものはあるのか。サブタイトルの「差別の科学史」が示すように、本書は過去の私たちが行ってきた「望ましくない解釈・利用」、つまりは人を測り分けて処遇することが、結果的には差別や人権侵害等につながる可能性について、歴史的な事実にもとづき解説している。これらは、私が専門とする心理学の領域に深く関わるだけでなく、哲学、歴史、社会、政治、福祉など、多様な領域にまたがるテーマである。大学院生として当然読んでおくべきとされたのも、むべなるかなと言える。

さて、検査で個人に優劣をつけることが、「科学の名の下に」私たちの内なる偏見にお墨付きを与えてしまうというのが、本書の重要なテーマの一つである。人種や民族、知能などについてのある種の偏見が、「科学的な」測定および結果の解釈に影響し、その結果として生じた悲惨な事実について、本書では述べられている。これらのテーマを扱う際、過去を現在の高みから断罪するのではなく、それは現在の私たちにも起こり得るのだという視点を常に示しているのが、グールドの素晴らしいところだ。例えば、学生によると、現在でも入社試験として性格や適性の検査を課す所があるそうだ。選ぶ側からすれば、それらの検査によって「科学的に」優劣をつけることができ、受験者を選抜するのに便利だとされるのであろう。しかし、その測定結果がその個人の性格や能力を正しく反映しているのか、更にそれを判別に用いることの是非等が真面目に問われることは少ない。例えば内田クレペリン作業検査は「延々と足し算を繰り返す」検査であり、ご存じの方もあろうが、被検査者にかなりの負担と苦痛を与える。そしてそれを試験として利用している職場は、結局「足し算を繰り返すような作業に耐えられる人材を望んでいる」ということになるのだが、その是非はほとんど問われない。このように、私たちの中の、「人間をわかりやすく理解・選別したい」という欲求は、過去の「失敗」と断絶したものでは決してない、そういう認識を、本書を読む人は突きつけられることになる。

他者を測定すること、測定結果に基づいて処遇することは、実に困難で注意を要することである。私はこの本によってそれを学んだ。そして、「私は測りまちがっていないか」という問いは、心理学研究者として、あるいはひとりのおとなとして、常に心に留めるべき事であるということも。従って、本書は若い学生諸君にも、もちろんおとなたちにも、是非読んでもらいたい本の一つである。

『ヤンキー文化論序説』

五十嵐太郎 編著

河出書房新社 2009年3月



僕が本を読む理由は、本によって知らない世界が広がる、または本から得た物の見方によって世界が違って見えることがあるからです（大学生の頃には、少しインテリを気取って格好を良く見せるためにも読んでいましたが）。こうした視野を広げてくれる本はそうは多くはありませんが、年に何冊か出会います。

そうした本の中から最近出会った、少し軽めの本を紹介します。五十嵐太郎（編著）『ヤンキー文化論序説』です。ふざけた本に見えますが、ヤンキーとその文化について、様々な執筆者が社会学・音楽評論・メディア論・ファッションなどの多様な観点から論じています。それぞればらばらな観点から論じているので、まとまりを欠いている面は否めませんが、逆に言えばどこからでも興味のあるところから読むことができます。ちなみに、この編著者の五十嵐さんはヤンキー専門家（？）ではなく、建築学の学者ですが、建築や都市に限られず幅広く仕事をしています。『結婚式教会』の誕生』や『過防備都市』など、これまた刺激を受ける本も書いています。

ヤンキーといってもそのイメージは人それぞれですが、この本ではさしあたり暴走族や不良集団が念頭に置かれています。その重要な特徴は、リーゼントや改造車などの（かっこ悪く見える）独特の美学を持ち、現在では失われつつある（都心では特に）、という点です。それゆえヤンキーは、1970年代から80年代前半にかけて流行ったツッパリ・不良文化を、今さらながらまだ続けている『痛い人達』と見られたりします。しかし、失われつつあるヤンキー文化を検討することで、それが持っている（いた）意味を探ることが、オタク文化全盛の現在では重要であるようです。なお、同時期に難波功士『ヤンキー進化論』という本も刊行されており、ちょっとしたヤンキー・ブームとも言われています。

本の内容をあえて大きく二分すると、（音楽、ファッション、マンガといった）ヤンキー文化の特徴とそれの持つ意味に関する論考と、地域社会の中におけるヤンキーとその文化の位置づけに関する論考とに分けられます。私の専門分野である都市法の観点から興味深いのは、後者の問題です。そこでは、地方の地域社会が空洞化する（失われる）とともに、ヤンキー文化も失われていった、というテーマが中心に据えられています。地域社会の濃密な人のつながりと地域内の定職（主として肉体労働・職人）が十分にあった時代には、中学・高校で勉強せずに不良になっても（逸脱しても）、高卒で職に就き地域の人間関係の中で生きてゆくことができました。しかし、地方の地域社会において高卒で就ける職がアルバイトぐらいしかなくなり、人のつながりも希薄になってゆく中で、彼らはこれまでのような人生設計ができなくなってきた中で、ヤンキー文化も失われていったと描かれています。ヤンキーをやっても地域で生きる人生設計ができていたのが、できなくなったからといって、みんながまじめに勉強をするようになるわけではありません。ヤンキーという選択肢が失われた中で、それとは違う形で学校文化から「逸脱」する子供達が現れているのです。それは「壊れた子」などと描かれています。逸脱する子供たちの受け皿としてのヤンキー文化と地域社会のつながりが失われた現在において、新たな受け皿がどのように作られるのかについてはこの本は答えていませんし、いまだ答えはないでしょう。日本における逸脱文化について、地域社会という点から光を当てた本書により、また世界が少し違って見えてきます。

『Presents』

角田 光代 著
双葉社 2005 年 11 月



いつものように図書館に本を探しにやってきて、小説の並んでいる棚をながめている。すると、他の本とは少し佇まいの違う本を見つけた。カバーのかわいらしさに惹かれて手にした本から、意外な問いがあった。

「いちばん心に残るプレゼントは何ですか？」

この本のテーマは、「女性が一生のうちにもらう贈りもの。」と、あとがきで述べられている。名前という贈りものからはじまり、最後に涙しながら、自分の人生を振り返る、12のお話である。

『Presents』に出てくるプレゼントは、その人にとってのプレゼントである。当り前に自分のものになっている名前、初恋、友達との友情関係、結婚、夫婦、家族、老い。人生の中でプレゼントは、プレゼントされた時のたくさんの情景といっしょに記憶となる。その時に何を思い出、何を選び、どんな出来事としてとらえるか、何を記憶に残

すかは、自分にしかわからない。他人から見れば当たり前にもらえるもの、大したことのないものでも、自分にとっては心動かされ、大きな変化となり、記憶に残るプレゼントになる。大切な人からもらうもの、うれしくて涙が出るプレゼント、必ずしも心地よい記憶だけでなかったり、辛いことであったり、理想と現実との違い、こんなはずではないのという気持ち、どんな出来事であっても、記憶として忘れられないものになる。

名前を与えられること、初恋、就職、結婚、家族、老いは、多くの人がまっとうする人生であり、どこにでも存在する。だからこそ、この本は私を惹きつける。

「多くの人が経験する、自分だけの記憶」

私は、これからどんなプレゼントをもらい、どんなものをあげたいと思うか。「そういえば、あげたものがあまり喜ばれなかったこともある。」こんなことを考えながら、自分が今までもらったプレゼントを思い出す。たくさんのプレゼントをもらった。それに付随し、自分の気持ち、熱、たくさんの人の顔、季節、色、におい、たくさんの記憶があふれて出てくる。

おもむろに携帯電話を手にし、ともだちにメールで尋ねる。「今までもらったプレゼントで、一番心に残っているプレゼントは？」即答で返事が返ってくる。

私のいちばん心に残っているプレゼントは何だろう。

この本を読めば、誰にでも自分のいちばん心に残るプレゼントが想起される。

Presents#8 の記憶では、主人公が、夫と同じようにものをみて、歩いていた道での思い出を夫と共有しようとする、夫と自分の記憶のズレに気づきこう言う。『私たちの記憶は食い違っている。じょじょに食い違っていくのではなくて、最初から食い違っているのだ。』

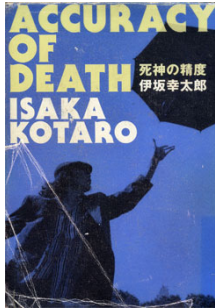
しかし、食い違っている記憶を持つと同時に、重なっている記憶がある。プレゼントは、もらうことによって、プレゼントした側と、プレゼントされた側の両者の記憶を交わせるためにあるのかもしれない。

Presents を読んだ人は、お話の中の主人公と同じように自分の **Present** たちを思い出す。それは、心地よく、切ない。しかし、もらった当時とは違う気持ちを見つけ、記憶の重なりが大きくなる。そんな気持ちにさせる小説である。

『死神の精度』

伊坂幸太郎 著

文藝春秋 刊 2005年6月



『多くの人に読んでもらいたい本』といえ、私は伊坂幸太郎の著書のいずれかを連想する。

そしてその『多くの人』とは、推理小説が好きな人、ファンタジーが好きな人、若い人、普段文字ばかりの本を読んだりしない人、映画が好きな人。他の人にももちろん読んでほしいが、少なくとも今あげたような人々には間違いなくお勧めできる。

今回紹介する「死神の精度」は、6つの短編からなる、一人の死神の物語だ。主人公は千葉という死神で、それぞれの短編には死を間近に控えた人間が登場する。時にはぱっとしない女性、時にはヤクザの男、時には片思いに悩む青年、そして時には老女。千葉はそれらの人間を1週間観察し、果たして彼らが死んでもよい人間か否かを判断し決定していくのだ。

この本は短編小説である。しかし「どの話から読んでも面白い」という類ではない。一つ一つの話は独立しているが、全編読み終わってみると、確かにこれらは一つの世界で展開された話だと実感できる。まるで、人と人とがそれぞれの人生を歩みながらも、どこかで必ず関わっているように、それぞれの短編がリンクしているのだ。これは、この本のみならず、伊坂作品に共通して言える特徴であり、私が伊坂作品を何度読んでもわくわくしてしまう原因の一つではないかとにらんでいる。例えば伊坂幸太郎のデビュー作である「オーデュボンの祈り」の登場人物が、別の長編「重力ピエロ」に登場する。「重力ピエロ」の登場人物が「死神の精度」の中で描かれる。単なる「物語」ではなく、私達の世界とは異なるところで時間を刻み歴史を作る「世界」が、まるでそこに存在しているように感じられるのだ。もちろん、その「世界」には時間が流れているので、死神である千葉と読者を置いて、世界は1秒、1日、1年先と進んでいく。この意味を詳細に書くと、俗に言う「ネタバレ」に通じてしまうので、ここでの発言は控えさせていただくが。

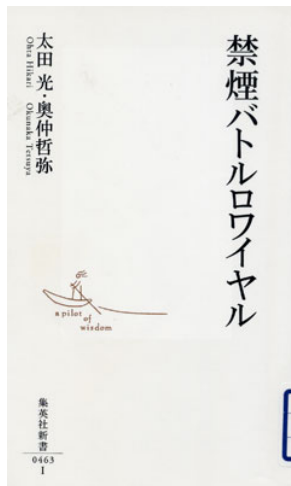
私が数ある伊坂作品の中からこの本を選んだのは、主人公である死神のキャラクターが非常に好ましいというのも理由の一つである。死神である千葉は、もちろん普通の人間ではない。だから、私達が当然だと受け止めていること、常識だと見過ごしていることが、千葉の目線から見ると思いがけなく新鮮な出来事に見えるのである。例えば彼は言う。「人間は不思議なことに、金に執着する。音楽のほうがよほど貴重であるにもかかわらず、金のためであれば、たいがいのはやってくる」「人間というのはいつだって、自分が死ぬことを棚に上げている」。また、死神は人間の言葉、慣用句や比喩表現に詳しくない。「自分は醜い」といった女性に「いや、見やすい。見にくくはない」と返したり、「年貢の納め時だ」と言ってきたチンピラに「年貢制度は今もあるのか?」と言って怒らせてしまったり。こういった、思わず噴き出してしまうような、作品全体の世界観を壊さないユーモアを、千葉と伊坂幸太郎は作り出している。

この本は映画化もされている。伊坂作品の中には「陽気なギャングが地球を回す」「アヒルと鴨のコインロッカー」など、映像化されている作品が多い。文字ばかりの本には抵抗があるという人は、まず映画から触れてみてほしい。「文字ばかりの本は好きじゃない」という理由だけでこの作品を知らずにいてほしくない。それではもったいない。それだけの魅力を、この本は、伊坂幸太郎という作者の本は秘めていると思う。

もし「死神の精度」あるいは伊坂作品に興味を持ってくれた人がいたら、紹介しておいてなんだが、ぜひ「死神の精度」ではなく「オーデュボンの祈り」から読んでもらいたい。ドラマやアニメなどを1話から見るように、「伊坂幸太郎」という一つの作品を1話目であるデビュー作から読んでもらいたい。他の本から読んで面白いののは確かだが、順に読んでいくことで、更なる面白さに触れられるに違いない。

『禁煙バトルロワイヤル』

太田光・奥仲哲弥 著
集英社新書 2008年10月



私の薦める一冊は「禁煙バトルロワイヤル」である。この本は、最近よくテレビ番組で司会として活躍しているお笑い芸人の太田光氏と、呼吸器の専門医師である奥仲哲弥氏が、それぞれ喫煙者と非喫煙者という立場からタバコについて討論する内容である。本文の節々で奥仲氏が医学的知識を駆使しつつも、圧力的にならずに喫煙の危険性を訴えかけながら、太田氏に禁煙の説得をしようとするが、太田氏の愛煙精神が簡単に折れてくれない（最終的に折れなかった）展開に私は読み応えを感じた。奥仲氏によれば、喫煙によってもたらされる主なリスクとして、心筋梗塞、肺がん、ED、肌の老化を挙げている。そして特に COPD（慢性閉塞性肺疾患）という疾患は、息を吸っても肺の中でたまった空気を次第に吐き切れなくなる症状で喫煙者を苦しめる最も恐ろしい病気の一つであるという。太田氏はこれに対し、別に病気になったっていいじゃないか、と豪語する。ここまで腹をくくってタバコをふかしている人間もなかなかいたものではないと思わず感心してしまった。他にもブリンクマン指数という喫煙者がガンを患う危険度数として紹介されていて、危険ゾーン 400 に対し、

太田氏 1000 と発病の危険性を奥仲氏は示唆するが・・・まったく太田氏危機感なし。さらに、喫煙によってもたらされる満足感というのは、脳内のアセチルコリン受容体がニコチンを代わりに吸収したためなのであって、「タバコを吸ってリラックスすると感じるのは、じつはまやかしです」と言われても、「不具合、マイナス要因があるからこそ、タバコって魅力的なんだと思う」と頑なな主張である。太田氏はタバコの害悪についてごもっともな主張に対しては、すんなり「タバコは悪者でけっこう」と喫煙の害悪を受け入れる姿勢だが、ただ引き下がるだけでなく、喫煙者には喫煙者の歴史がある、喫煙することでその人の魅力も引き出すことだってできるんだというようなタバコがマイナス要素だけではないというような主張も展開している。また本文の中に、お互いの対立意見だけでなく、最近では禁煙ブームによるタバコに対する極度な嫌悪や排斥運動をする団体も立ち上げられているという話題が出たとき、彼らの活動にはヒステリックな一面性を持っていると危険視する両者の共通した意見もあり、両者は対立的な意見を持っているはずなのに、共感する点も持ち合わせていた。このことから二人がタバコに対して真摯な考えを持っていることも窺えた。この本は喫煙を薦めるでもなく、禁煙を薦めるでもないどちらか一方の立場を擁護しているという内容ではない。タバコによってもたらされる害やメリットを知識としてまずは取り入れてほしいという目的があると読みとれた。よって非喫煙者の奥仲氏による喫煙に対する医学的な意見と太田氏の意見のどちらが正しく、間違っているというのではなく、どちらの意見にも耳を傾け、自分がタバコに対して何かを考える機会を両者の意見を通して図れるのではないか。これが本書の魅力であり、老若男女問わず、読めば有意義だと思う。「タバコはやめたいけれど、つつい吸ってしまう」とか、「禁煙するけれどなかなか続かない」というような、タバコを吸うか吸わないかで右往左往している方には特にお薦めしたい一冊である。

『ショート・トリップ』

森 絵都 著

理論社 2000 年 6 月



「皆さんは旅をしたことがあるだろうか？」旅行なら多くの人が経験したことがあると思うが、旅となるとそうそういないだろう。私の紹介するこの本。「ショート・トリップ」は旅をテーマにした短編集である。この本は 40 種類ものショートストーリーが入っており、それぞれ時代や設定が違うのだが旅をテーマに絵本風書かれている。この本を読めば、少しでも旅をしたような気分になれるのではないかと感じ、紹介することにする。

またこの本は、普段あまり本を読まない人にもお薦めしたい。私自身普段本を読まない人なのだが、この本はもともと「Further sight 旅のかげら」というタイトルで毎日中学生新聞に連載した短編 52 編のうち、40 編を選んで加筆したものである。中学生を対象にしているのでとても読みやすくスラスラと読んでしまった。なので本を読みたいのだが、難しそうなものも多くて、手をつけにくいなどと考えている方には、この本

をきっかけにして読書を始めてみたらいかがだろうか。また普段からよく本を読む方でも気軽に読めるものなので息抜きやちょっとした時などにもお薦めである。

普通の本はページを飛ばして読むと展開がわからなくなってしまうがこの本は短編集なので話が繋がっておらず、40 種類の中からどの順番から読んでも問題ない。また一話につきページ数が 2~3 ページなので一話があつという間に終わってしまう。だから飽きることがなく読めてしまうのがこの本の魅力のひとつだ。また本の内容も魅力的であり、40 種類もあるのだがどれも味のある作品で笑えるものから人の生き方を皮肉ったものまで様々なものがある。

この本はそのまま読んでも面白いのだが先ほどにも書いたように一話につき 2~3 ページしかなく内容があまり濃くない。そして一話一話の最後が「これで終わり!？」みたいな展開が多く存在している。だからこそ自分なりにそれぞれの物語を深読みするとより楽しめるかもしれない。「この続きはどうなるのか」「こういう解釈もできる」など見解を広めていけばすぐ読めるこの本でもいいボリュームになると感じる。

ちなみに私は「究極の選択」「ファンタジア」「パン爺の旅行靴」が個人的に好きである。きっとこの本は人により捉え方や感じ方が変わるので好きな作品も様々になると思う。自分の好きな作品を探すのもひとつの違った楽しみ方かもしれない。この本に書かれている作品はどれもまったく違う展開であり、見解もまったく違う。上記の 3 作品以外にも「日曜日の朝は・・・」「借り物競争」など冒険心をくすぐるものやファンタジックで、尚且つユニークなものが多い。だからきっと読んでいるうちに旅をしているような気分になつけると思う。本来は中学生向きに書かれたものだが、大人が読んでも十分に楽しめる。むしろ大人が読んだほうがこの本を理解しやすいし、雰囲気を楽しめるだろう。

この本は時間がない人や普段本を読まない人、年齢も関係なくどんな人でも気軽に読めるので、ぜひ多くの人に読んでもらいたい。そしてそれが自分のためになったかどうかなどは関係なく息抜きや本を読むきっかけになるような本だと私は感じた。確かに勉強になったり生き方の手本になるような本を読むことは大切である。しかし、それだけではなく筆者の独特の世界観を楽しむというのも本の役割のひとつであると私は考えている。だからこそこの本を読み、「本の世界の旅」をしてみたらいかがだろうか。

JP * FANs

「アイデアをカタチに。」



松本みなみさん（人文学部臨床心理学科2年）



加嶋美春さん（法学部法律学科2年）



井上博雅くん（人文学部人間科学科2年）

——JP * FANs というのとはどういう意味ですか。

松本 JP * FANs は今年卒業した守田英世さん（注1）が立ち上げたのですが、<日本（JP）のファンになろう！>ということから<みんなで応援しよう！>というメッセージを込めています。企画提案を行う上で、相手のファンにならないければ、よい提案・交渉はできないからということです。

——立ち上げのきっかけは何ですか。

松本 大学側と学生側の意識の差をどうやって埋めようか、ということです。大学は頑張る学生がいない、アイデアが出てこない、という。うちの大学には未開拓な部分がいっぱいあるのに、大学のいうボトムアップでは学生の個性は育ちません。一方、学生はめんどくさい、とりあえず今に満足、という。この意識の差をどうやって主体的な活動にふりむけられるだろうか、と守田さんは考えたそうです。



——それで学内企画提案団体として活動を始めた訳ですね。

加嶋 はい。昨年の秋にある先生から、経営学部の新入生向けに、大学の施設を紹介するプロモーションビデオを作らないか、という話がありました。それで、映画研究会と劇団サンズサンの協力を得て、プロモーションビデオを作りました。編集は春休みまでかかりました。これは経営学部新入生の事前学習でしか見ることはできませんでしたが。



——どんな内容ですか。

加嶋 「ブラウニーを探せ」というタイトルですが、行方不明になったブラウニー（注2）を探して大学の施設を紹介するものです。

——面白そうですね。

松本 韓国の観光局によるプロモーションビデオで、日本人の女優が韓国の男優を探して韓国を旅するというのがあったのですが、それにヒントを得ました。

——井上君は今年になって新たに **JP*FANs** に入っていると聞いています。

井上 はい。僕はモバイルサイトの担当ですが、一応盛り上げ役ということで。



——図書館のDVDの書架のディスプレイもやってくれて、図書館としても助かっています。

加嶋 やっぱり、ただ並べておくだけではなくて、冒険アドベンチャーを集めて展示したり、1 講義 (90 分) の空き時間で観れるものを集めて展示したり、内容の紹介文をつけたりすることで、手にとってもらえると思います。

——いいアイデアですね。これからやっていきたいことはありますか。

松本 ECO キャンパス計画というのを考えています。いま企画書を作成中ですが、例えばゴミの分別にしても、地球温暖化に取り組む札幌学院大学としてもっと厳しくやれないかな、と考えています。エコキャップ推進協会という NPO 法人があるのですが、全国各地のボトルキャップ回収業者と連携し、集められたボトルキャップをリサイクル業者に売却するのです。キャップは 1 kg が 15 円～20 円で買い取られ、協会ではそのうち 10 円をワクチン代として「世界の子供にワクチンを 日本委員会 (JCV)」に寄付しています。JCV はユニセフを通してワクチンを購入し、現在、ミャンマー、ラオス、ブータンの 3 カ国に届けているようです。こういった活動に興味があります。

——なるほど。それこそ大学とコラボレーションできれば理想的なんでしょうね。

松本 そうですね。新入生向けのプロモーションビデオにしても、大学のホームページに掲載できれば皆が見ることができるのですが。

——図書館を紹介するプロモーションビデオも作ってほしいですね。

井上 もっとメンバーが増えてくれればいいんですが。興味のある人はいつでも連絡下さい。毎週火曜日の昼休みに、図書館 2 階のグループ学習室に 3 人いますので。

——これからの活躍を期待します。

(注1) 在学中に単位互換大学の松山大学へ留学。帰ってきて、JP*FANs を立ち上げる。

(注2) 大学のマスコットキャラクターのエゾリス。



DVD 書架



イラストは美術部長の
鈴井麻里奈さんの作



紹介カードは加嶋さんの作

南の島でバカンスのススメ。

平松 愛（図書館）

今年の夏は涼しい日が多く、あまり夏という感じがしませんでした。みなさんは夏休みをどのように過ごしましたか？ 楽しい思い出をたくさん作ることができたでしょうか？ さて私はというと、ランカヤン島へ旅行に行ってきました。ランカヤン島はマレーシアのコタキナバル空港から、さらに国内線に乗り継ぎ、そこからボートで90分、1島に1リゾートの小さな島です。

日本ではまだガイドブックなどにもあまり載ってなくて馴染みがないようですが、欧米人がよくバカンスに訪れるようです。実際私が滞在している間も、滞在者の9割は欧米人でした。彼らはよく連続した休暇を南の島で過ごすようですが、海しかない一周歩いて15分程の小さな島で、散歩をしたり、ダイビングやシュノーケルをしたりしてのんびりと過ごしていました。



リゾートには、テレビはラウンジに1台のみ、パソコンも何十年前の型？ というくらい古いものが一台、携帯電話なんて圏外というアナログな島なのです。そんな島ですが、大きな本棚があって、そこに世界中の旅行者たちが置いていった本がたくさんあり（島のスタッフはこのスペースを“ミニライブラリー”と呼んでいました。）滞在中、自由に読めるようになっていたのは重宝しました。ダイバー達が置いていっただろう水中写真集や魚の写真集、古い洋雑誌、もちろん、日本の小説、旅行雑誌などもあり、私はハンモックに寝そべりながら何冊も読んで帰ってきました。

この島は、4～9月の産卵シーズンに、海亀が産卵しにくる島としても知られていて、運がよければ見られるかも・・・ということだったのですが、なんと幸運にも滞在初日の夜、体長1mもの海亀が産卵する様子を見ることが出来ました。満天の星空の下、海亀が懸命に産卵し、ゆっくりと海へ帰っていく様子は感動モノでした。また別の日には、卵から孵化した子亀たちを放流することもできました。

普段、パソコンや携帯電話と切っても切れない生活をしている私たちですが、こうやってそれらと無縁の生活を体験してみると、これがなかなか楽しかったりします。世界遺産や美しい町並みを見て歩く旅も、美味しいものを食べ歩く旅もいいですが、たまにはこういった何もない島で“何もしない贅沢”を味わってみるのもいいと思います。思いがけない出会いや体験が待っていますよ！

みなさんも、南の島の大自然の中で潮風を感じながら、読書してみませんか？

今年は太宰治の生誕 100 年ということで、あちこちの図書館で展示等の企画をやっているようです。本学図書館も年に数回企画展示を行なっていますが、10 月の企画展示「読書マラソン October」も、当初は太宰治が念頭にありました。なぜいまの若者に太宰治は人気があるのか、とても興味があったからです。

テレビでも太宰を取り上げる番組があったほどです。印象的だったのは、若い女性が太宰の魅力について「学校の先生に悩みを話しても、先生は自分の経験から解決策を示してくれるのですが、太宰さんは一緒になって考えたり、悩んだりしてくれるのです。そこが凄いです」と語っていたことです。

なるほどなあ、と思いました。一緒に考えたり、悩んだりしてくれる人を若者は求めているのですね。結局、しばらく考えた末に、今年の 10 月企画展示「読書マラソン October」は村上春樹に焦点を当てることにしました。文芸部の学生さんにも協力してもらって、いくつかの作品の「おすすめ文」も書いてもらいました。村上春樹も『1 Q 8 4』が爆発的に売れていてタイミングがいいし、今の若者（大学生）は村上春樹をどう読むのか、興味があったからです。同時に、私にはなぜ『1 Q 8 4』がこんなに短期間で爆発的に売れるのか、よく分からないのです。一説には、2 冊あわせて 400 字詰原稿用紙で 1984 枚になるという長編です。ただ単純に、しばらく新作の長編が発表されていなかったのも、待ちきれなかった読者がたくさんいたという事なのではないでしょうか。私が知る限りでは、話題になっているから読んだ、という人もかなりいるようです。中にはそういう現象に対してマイナスの先入観が働き、村上春樹は読まない、という人も出てきます。（やれやれ）

ただ、一つだけ村上春樹の弁護をすれば、『風の歌を聴け』（1979 年の群像新人賞受賞作）でデビューしてちょうど 30 年になりますが、まったくといっていいほどメディアに出ることなく、「書く」ということに集中してきた稀有な作家です。その作家としての姿勢がとても潔いのです。村上春樹は文章を書くコツについて、エッセイ集の『村上朝日堂はいほー！』の中の「チャンドラー方式」というエッセイに書いています。興味のある方はぜひ読んでみてください。

ところで、最近私は夏目漱石が気になっています。漱石については知らなかったことが多々あって恥ずかしいのですが、国民的作家という一般的なイメージとは異なり、実際の作品は暗く重たいものが多いようです。しかし、その作品に流れている通奏低音が、実に今の世の中と通じていることに驚かされます。そして、漱石を読んでいると私はなぜか村上春樹がオーバーラップしてきます。村上春樹もこれだけ読まれると、将来的には国民的作家としてイメージされるのではないかと、思います。（すでに国民的作家かもしれませんが。）しかし、実際の作品は暗く重たいものが多いのです。読み返すたびに新たな発見があります。

さて、「書林」第 76 号をお届けします。いつもながら執筆者のみなさんにお礼申し上げます。お忙しい中ご執筆していただいた先生方、夏休みの一部を原稿書きで過ごすことになった学生さん、時間の都合をつけて集まっていたいただいた JP*FANs のみなさん、さらに編集の最終段階での執筆依頼に快く(?) 応じてくれた泉さんと平松さん、みなさんありがとうございました。

~~~~~  
札幌学院大学図書館報「書林」第 76 号について

- \*掲載記事の著作権は札幌学院大学図書館にあります。
  - \*記事・写真の無断転載は禁止します。
  - \*紹介図書の写真については、各出版社から掲載許諾を頂いております。
- 許諾を下さいました各出版社の皆様には心からお礼申し上げます。
- ~~~~~